

山と博物館

編集 大町山岳博物館



冬の鹿島槍ヶ岳

Mt. Kashima yari gatake
in winteter

大正15年3月、最初に冬の鹿島槍ヶ岳にいどんだのは一高のパーティーであった。それ以来32年の歳月は流れて近代アルピニズムの進展とともに、冬山の雄鹿島槍ヶ岳にみせられた人々が年々増加している。雪、氷、風、あらゆる条件と斗い、冬山の限りない大自然の美、生まれ出する楽しさを求め、養う忍耐力体得する技術。これは単に技術冬山にいとむ人々のみが知る喜びであろうか。

【撮影 船越好文】



写真上 第1、2号環状石離、配石址を複製したもの、写真右 堅穴址

価値ある環状石離

大町市の上原遺蹟から

北アルプス鹿島槍ヶ岳の山麓、大町市平野口の北条屋敷（ほうじょうやしき）[地籍にある遺蹟は、縄文式諸磯（もろいそ）期の土器を主体とした一大聚落（しゅうらく）址である。樹木が繁っていたため発見はおくれたが、昭和22年開拓団の手によって、多くの土器、石器の出土をみた。昭和25年4月、国学院大学大場磐雄教授の指導で発掘が始まり、第三次調査にまでおよんだ。この遺蹟は鹿島槍ヶ岳と針ノ木岳に源流を求め鹿島川、籠（かご）川と槍ヶ岳から流れ出す高瀬川の合流する丘陵地域で、村人は上原（うわっぱら）とよんでいる。上原遺蹟は出土遺物や各種遺構の中から、従来このような遺蹟で見ることのできなかつたものが発見され、考古学会に重要な問題を提示した。発見された堅穴址は住居に使用されたと思われるもの、それに関係あると考えられるもの、全く関係ないものなど、

各種にわたり、また昭和25年5月に発見された配石址は大場博士に



よって復元され、環状石離（かんじょうせきり）と名命された。この環状石離に使用されている石は長さ50~100cmの柱状の安山岩で、鹿島川支流の矢沢に多く見られるが、遺蹟の西南沖積層上にも相当見られるので、この付近より運搬したものと考えられる。石離の形状は2、4mはなれて第1号と第2号が南北に二つ接し、いずれも中心柱の周囲に側石柱が楕円形に樹立し、両石離の中間に西立（にしたて）石と、そこからのびる線上5mはなれた東立（ひがしたて）石あって、中間にはコブシ大の石を集めた円形積石がある。環状石離は付近から出土した土器などより関東地方の諸磯B、C類（石器時代の前期末）と同一の時代であると考えられ建造の目的はなんであったかは決まらないが周囲の遺蹟から上原住民の共同祭祀場ではないかと考えられている。とにかく、わが国における巨石遺址、とくに環状石離は北海道だけであり本州では発見されていなかった。

しかし近年になって秋田県や岩手県を始め、各地に類似遺蹟が報告され、現在では10数箇所になったが、その内容や年代などについては一定したものがなくいろいろな点で決定的な結論を得ていない。その意味からも上原遺蹟の存在は重要視される要因を含んでいる。

（編集部）



写真左 円形積石および南方測溝内の丸石の出土（上方に見えるのは第1号石離）写真上 測溝内の土器の出土

カラスのむれ

その生活を追って

日本で普通カラスと呼ばれ、私たちに親しまれている鳥に二種類ある。ハシフトガラスとハシボソガラスがそれぞれである。ハシフトガラスの方はその名の示すとおりくちばしが太く体つきも大きいのに対し、ハシボソガラスは前者よりくちばしが細く、体つきもすんなりしている。何れも留鳥であって年中その地にとどまり、人家付近を生活の舞台としている。昼間は田畑や川岸、海浜などに群れ集り、人間に対してはいささか悪業も働く。

「権兵衛が種まきカラスがほじくる」……田舎ではなつかしい風景の一つである。

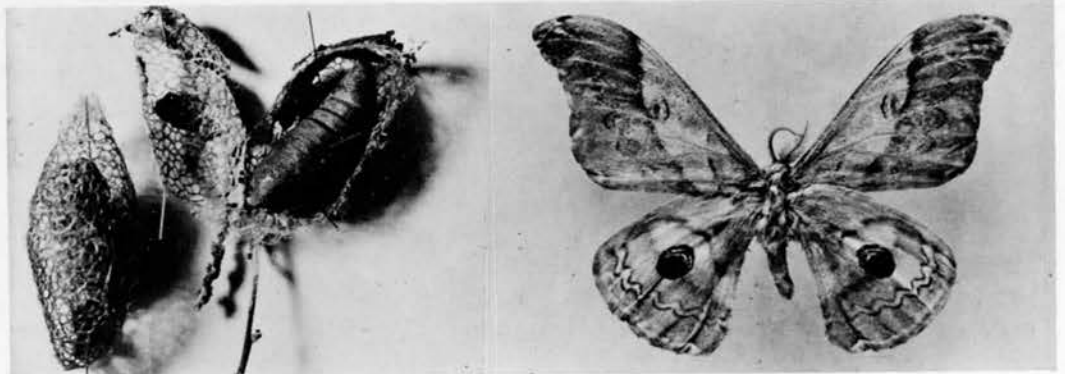
カラスは雑食性である。キビ、アワ、トウモロコシ、ヒエ、大豆、アズキなどの農作物をはじめ、リンゴ、カキなどの果実、カエル、魚、昆虫、更にはタニシやノネズミなど実にさまざまなものを食べる。同族のカラスや小鳥、ヘビ、リス、ムササビなどの巣をおそって卵をかすめることも多い。森林や田畑の害虫を捕食し、ゴミ捨て場の整理もやってくれる。こんな功績もあるとは云え、益鳥の巣荒し



クスサンの話

冬の枯野にさむざむとツツ立っているクリやクスギの枝に写真のような粗製のマユが木がらしにからからと乾いた音をたて、揺れているのを見かけるだろう。これはクスサンのマユガラなのであり、本当の生命は枝からだいぶ下った幹の基部などに数十コの卵塊となって冬越ししているのである。無事に越冬しおえた彼らは、翌春芽吹きとともに卵殻を喰い破って、若芽を腹一ぱいむさぼり喰い、4回の脱皮をおえる頃には体長も150mmに達し、エメラルドの皮ふに長毛とコバルトの斑紋を備えた巨大な毛虫に成長する。

さてこの時期になるとそろそろ蛹化(ようか)準備を急ぐので彼らの食物であるクリやクスギは遠慮なく喰い荒され、時に甚大な被害をこうむる事があるが反面「シラガタロウ」などと呼んでこの毛虫の成熟した絹糸腺(けんしせん)から釣糸用



や農作物に与える害を見ればやっぱりいたす者といわざるを得ない。

彼らは夏の間雌雄づれで生活し、ひなを育て、幼鳥が成長する初秋の頃から、ふたたび集団生活をはじめ。秋の日は静かに暮れゆき、出稼ぎ地からカラスの群が帰ってくる。

夕焼け小焼けで日が暮れて 山のお寺の鐘が鳴る
お手てつないでみな帰ろ カラスと一緒に帰りましょ
カラスのねぐらは人里付近の樹木の梢である。カラスの



群はねぐらの上空を数回まわってから林へ下りる。彼らは互に適当な宿り木を物色し、鳴き立て、いるが、日暮と共に眠りにつく。

11月に入ると北アルプスの峰々は白銀に装い、麓の里にも冬が近づく。「枯枝にカラスの止りけり秋の暮」……葉が落ちて木々の梢がすっかり明るくなる頃からカラスの姿が目立つ。そして初雪がちらつき、長くきびしい彼らの冬ごもりの生活がはじまる。だが、この黒い鳥の姿は年々少なくなって行くようである。村は町に変わり、町は都市と化して、カラスのねぐらの森も少なくなった。

【写真はねぐらに帰ったハシボソガラス】 (編集部)

のテグスを造り出す事も出来る。とにかく、7月上旬〜下旬にかけてこの毛虫も前述のマユを造って蛹化し、ほぼ1ヶ月をへて写真のごとき大型の蛾に羽化するが、はねの開いた長さは100〜120mm、又オス、メスの見かけの違いはその触角で区別できる。即ち前者は羽毛状だが、後者のそれは、櫛歯状(くしの歯状)である。日本全土にごく普通で、初秋の灯を慕って飛来する。

(大町山岳物産学芸員福島融)

写真上 冬越冬中の卵塊、下 触と成虫

人工衛星

大町市で観測

地球観測年の花形、人工衛星は大町市では博物館の天文同好会や銀河会々が中心になって観測を続けています。そしてここに上げる写真は落下直前ともいう11月28日夕方の1号衛星の推進ロケットのいさましい姿であります。人工衛星1号および2号はどうなっているのでしょうか。まず第1号について調べて見ると、本体である衛星(球体)の方は飛んでおりますが、ロケットの方は12月1日頃、落下してしまいました。もう一つのキャップの方はどうなってしまったのでしょうか。今のところ見失っておりますが、まだ落下はしていないでしょう。2号の方は現在変化しながら地球を廻っており、このロケットにもキャップがあったはずで、これも廻っていると思います。2号は1号よりも高い所を飛んでいるにもかかわらず、来年の始めには1号よりラジオを聞いたり、先に地上に落下するものと思われる私たちが新聞を見たりまた実際に観測をしていますと、次のような疑問が起きてきます。

- なぜ1号の衛星より先にロケットが落下したのか。
- なぜ1号の衛星は球形に作ってあるのか。
- なぜ2号は明るくなったり、暗くなったりしながら廻っているのか。
- 2号に乗っていた、犬のかわりに私たちが乗っていたとすればどんな気持だろうか。



十一月二十八日十七時二十五分、露出二十秒、F三、五・ヘビツカイ座デルター星より金星の下を通過、イテ座で消光す。森義直撮影。

- なぜ人工衛星や月は地球を廻るのか。
- これらの疑問の中には大切な要素が含まれていると思います。みんなで研究してみましょう。

(大町銀河会会員 森 義直)

【博物館だより】 11月19日明科方面鳥類生態写真撮影 22日同好会だより発行 24日染色同好会 27日山の歌声同好会、文化祭反省会 30日天文同好会 12月1日登山同好会、グループ代表者会 4日館員会 6日信濃大町町内陳列替 10日調査員会 11日~15日動物園移転計画 12日山の歌声同好会、教育映画試写会 15日染色同好会、登山同好会 17日山の歌声同好会 19日~20日動物園冬囲、館内一部展示替、山の歌声同好会、天文同好会報一号発行

えぐり舟 博物館資料の案内①

昭和29年3月、木崎湖畔から4番目に発見され、栗材を使用している。石器時代の水上運搬用具で、古代舟の残存といわれている。

湖畔の人たちは



「とっこ」とよび、最近まで利用された記録が残っている。
(傘木伸自氏外5名より寄贈)

お願い 本紙の購読御希望の方は1年分購読料170円(郵送料共)を現金書留または郵便為替、郵便切手で御送り下さい。 大町山岳博物館

(今月の寄贈) テン1体熊谷組 ヤマイタチ1体大町市八日町 曾根原文平 図書羅和辞典1冊 図書初等ラテン語文典1冊法政大学体育部 図書千山万岳1冊 図書高山植物採集及び培養法1冊 図書やま1冊東京都志村寛 (敬称略)

全紙面の刷新

明年1月号より

明年25号より、みなさんの要望により、大々的に全紙面の刷新をいたすことになりました。

新しい方向で豊富な内容と執筆陣を備えて、1月号は必ず満足いただけると思います。なお、日常生活にまた教材に、より意義ある「山と博物館」に育てるために、今後のお力添えをお願いします。

- 山岳、スキー、歴史、民俗、考古、風俗、気象、岩石、地質、天文、動物、植物に関するもので、全て山岳が中心になります。
- 研究報告、手引、解説、講座、紀行文、随想、資料紹介、論説、調査、報告、短報など、興味深く、読み易い編集で一般より公募します。
- 博物館ニュース、山とスキーに関するニュース。
- 体裁はB5判8頁。

大町山岳博物館

山と博物館 No.24 1957.12.20発行

発行所

大町山岳博物館

長野県大町市神楽町電話211番

印刷所

信州印刷株式会社